

特集◎第6回雪舟の里総社墨彩画公募展 2p

光と影を巧みに表現
雪舟大賞は山本真一さんの「黄昏」

【輝いている人】7p

原田のどかさん

【まちの話題】10p

和楽の彩 市民大学講座 浅野幸恵さん満100歳

【市政トピックス】4~6p

雪舟足跡めぐりツアー参加者募集 市職員3人募集

10月からパスポート申請は市役所でほか

【地産地食】19p

桃

お知らせ11~16p

ボイス17p

人権18p

●シリーズ●8p

「やっぱりええなあ。総社のまち」「介護保険」「健康アドバイス」「市長室から」

Sesshu 雪舟没後500年

Master of Ink and Brush: 500th Anniversary

宝福寺に立つ雪舟禅師之碑



雪舟禅師之碑（宝福寺）

碑文は「井山乃雪舟禅師乃碑波毛余」という文章で始まります。

雪舟は最初、宝福寺に入り、出家したと伝えられています。宝福寺は臨済宗東福寺派の禅寺で、生地赤浜の西方約6kmのところにあります。雪舟と宝福寺との関わりを示す資料は、「吉備物語」や「本朝画史」以前には皆無ですが、江戸後期ともなると、宝福寺と雪舟との結びつきは当然のこと、既定の事実と受けとめられ、理解されてきたようです。

それを裏付けるのが、文化14年（1817年）、寺域内に雪舟禅師の碑を建てる計画が推進されたことでしょう。これは備中一宮吉備津神社の神職の出身で、本居宣長門下の国学者である藤井高尚が撰じた文章を、当時有数の儒学者で、書家としても名高い頼山陽が墨書したものを刻

むという構想で、建碑の主唱者は、八田部村（総社市総社）の豪商「戎屋」亀山道本でした。彼は高尚の門人であり、亀山家に逗留した縁のある山陽に揮毫を求めたと思われます。が、そのときは建碑にまでは至らず、境内に姿を現わすのは計画から100年以上も遅れた大正末年から昭和6年の間のことでした。犬養毅や大原孫三郎ら、地元各界名士の力を総結集してようやく建碑事業が成就したのです。

この「雪舟禅師之碑」は仙台石製で、高さ454cm、幅145cm、厚さ36cmという偉容を誇り、碑面は上中下の3区に分けられて、上区円相中に雪舟自画像、中区に雪舟筆育王山図、下区に前述の藤井高尚撰文、頼山陽書の碑文を刻んでいます。碑文は宣命体風の擬古文を用い、文字は万葉仮名の用法を交えたもので、独特の雰囲気漂わす異色の表現です。これらは東京美術学校校長正木直彦ら3人の監修の下に刻まれたものでした。

とはいえ、雪舟在世時に記述されたいくつかの史料の文面をそのまま解釈すると、雪舟は誕生後、地元の宝福寺ではなく、直接、京都の相国寺に入寺したと考えるほかありません。

この点については次回に。

文／岡山県立美術館学芸課長 守安 収